

ジョン・レノンのLPを聴いていた。微妙に上下しながら円盤を滑らかに廻るレコード針のアームの動きを見てみると、瞑想に耽ってしまうものだ。真空管のアンプ *amplifier* で増幅出力し、様々なスピーカーから音が鳴らされている。ウーハーやツイーターなど昨今余り見られなくなったものたち。レコードの音はデジタルのように鮮明ではないのに、なぜか生々しさを孕んでいる。このヴィヴィッドな感覚は現実性と呼ばれる感覚だ。或る種の感動のようなもので、真実味を観取したと感じさせるあの感情を心に惹き起こす。

スイッチのようなものかもしれない。そう言えば、昨今人と機械の差異が定め難くなっている。たとえば学習能力によつて経験知を積んだり、聞いた言葉を瞬時にインターネットで検索したりすることによつて、臨機応変な反応が可能な人工知能 (*artificial intelligence, AI*) など、(単純に考えると、到底人と同じとは思えないが) 甚深に思料すればするほど、我々の日常の考えが実に感覚的で曖昧で、その理解には多くの想い込みが含まれ、機械と人との差異など、実は思っているほどにはないことに気が附くのだ。

人工知能は意識を持ちうるか。これは主体性とも言い換えられる。

たとえばのようにAIを精巧に作るうとも、所詮人工知能には、我々のような感受する主体性があるわけもなく喜びや痛みが自分のものとしてあるはずもない、と思うが、しかし我々にしても、もしかしたら『意識』として観取させるように仕組まれているから、そう観取しているに過ぎないのでは、などとも考えると、絶対に違つとまで言い切れるかどうか、確信はない。

結局自分の双眸で自分の双眸を直截見られないように、我々是我々の意識の当事者であつて、我々の意識への客観性を持ち得ないのだ。我々が日々切実に喜怒哀楽するこの感じ、この主体性という感覚も、どれほど『自分』なのか、本当に『主体』なのかと、疑いたくもなるのである……

などと確かめようもない虚しい想いに浸っていると、彼がふと尋ねてきた。

「真実とは何か」

大きな皮革装丁の羊皮紙の頁をゆくりめくつて舐めるように鑑賞していたが、唐突に顧みて、真顔で訊いてきたのだ。曲がちやうど『真実が欲しい Gimme Some Truth』に替わつて数秒経つたときだった。問われた天平普蕭は腕を組んだが、1秒と経たずに口を開き、

「そうだなあ、何だろう、たとえば、真なること、本当のこと、あるがままの事実、真の現実、確かに存在する現実の存在、偽りでも仮象でもない実体、そのものたる本質、正しい判断や思考の根拠とするに足りる確かな何か、つて、感じかな」

「なるほど、生きて行く上には是非必要なものごと」

「たぶんね。」

なぜ君はそのようなことを訊くのか」

「小生がさように聞うて何の不思議があるうか。人として最もすべき質問ではないか。真の人間性に於いて、これ以上にすべき質問は存在しない、ふ…ではないのかな」

「確かにそのようだね」

「が、しかし。…いったい、それは、如何ように探せばよいか。卿はどうかね」

「大変な作業だが、理想を言えば、すべての前提条件を捨て去つて、思考を解き放ち、何も根拠のない、零の状態から出発して、すべての面から驗し、噛み砕いて分析解析して検証し、それにも耐えて最後まで残つた公理が真実というべきだろう」

「むろんすべてを根源から無<sup>な</sup>みして検証し直すことは不可能だ。すべてを確定事項とせず、何一つ無条件に利用（是認）しないしよう。

するとたちまち行き詰まつてしまふだろう。

何せ、出発点とすべき足場が造れないから何も語り始められない。又さようなこと（足場を造れないということ）は自明のようでもあるが、それすら或る措定から成立しているとするならば、もはや我々は何を言うことができるだろうか。

一切は畢竟まで究竟するところ、ただの措定だ。根拠もない、唐突な措定だ。そうだからそうというだけで、根拠が示されていない。

一例を挙げれば、〃確定事項でなければ検証に利用してはならない〃という規定がそうだ。これもまた純粹な論理によつては根拠が明証されていないもののうちの一つだ。

ただ唐突に、無条件に利用されている考概のうちの一つだ」

「そうかなあ。そんな風に考えるものなのかなあ。

そう言つてしまつともう、何もできないじゃないか。意味がない。我々は現実を生活しているというのに、そんな埒の開かないことじゃ、ダメなんじゃないか。

何よりも我々は生活しなくてはいけない。

実生活を見たまえ。たとえば君が言つた〃確定事項でなければ検証に利用してはならない〃というのは一理も二理もある。

たとえば、食べられるかどうかかわからない食べ物を食べることに一定のリスクがあるのは明確だ。安全を求める者は食べても安全であることが証明されていないものは食べない。つまり明証のないものは利用しない。

だから論考に於いても検証を要求することは必然的なことだ。検証がなければ誤謬に導かれる可能性がある。誤謬を避けたい者は未検証を避ける」

「しかし誤謬を避ける理由が明記されない」

「避けなければ死に至る現実があるからだ」

「死に至っていけない理由はただ実存的な理由、又は生存への意志が各個体に与えた命題でしかない。それが正しいかどうかの根拠がない」

「正しいことを求める根拠もないな」

「そのとおり。真実を欣求する動機や理由はあっても、それを欣求すべき根拠はない」

「で、結局どうしたいんだ？」

「言うのもつまりは、的も射程もない発砲はムダ玉だからだ」

「ムダが誤謬である根拠もない。ふ。図に当たらぬは大死などといふ事は、上方風の打ち上りたる武士道なるべし、か。まさしくさようだ」

「おいおい、『葉隠』かい。：そこまで言うなら、そもそも誤謬だの正解だの根拠だのって、何だ」

「お、いいね。わかってきたね」

「いや、これはわかるようなもんじゃない」

「尚更いいね。やはり我が智友は君しかないよ。」

すべての考概（かんがえ）と、考概の法則を解析し、糺したまえ。

理を解体してその構造と由来を究め尽くせ。

思考のモナドである諸々の概念（本質、アイデア）をどこまでも何度でも咀嚼して吟味し、その理解を鍛え、質したまえ。

無限のカタチがあり得たはずなのに、なぜさような輪郭（ライン）、さような形式（スタイル）・形態（フォルム）が選ばれたのか。なぜ他ではなくて、それなのか」

「わかりようもない。」

ただそれは他の在り方があるということ的前提にしているよね。いくつかの選択肢があつたはずなのに、なぜそれなのか、と問うことは、他にいくつかの選択肢があることを前提にしている。

結局、問うということは、選択肢があつたはずであることを前提にしているということがよくわかる。そしてなぜそうなのかという問いは、すべての問いの基本だ。なぜそうなのかを問うことは、そうでなければならなかった意義・意味や理由に繋がるし、それが何であるかという本質への問いにも繋がるから、ありとしあらゆる問いの前提とも言える。

論理自体が畢竟、なぜそうなのかを問うことに帰結するから、選択肢という概念・選択肢があるという捉え方が論理の基礎の一つであることがわかる」

「そうだね。」

同じことだが、もう少し附加すれば、そもそもライン・スタイル・フォルムなどのカタチとは何なのか、カタチが

設定されたコンセプトは何か、コンセプトというカタチは何か。なぜそれが選ばれたか。なぜ他ではなく、それなのか」

「余計わからないが、無限に続けられそうだな」

「だが続けることにも又疑問が投げかけられるだろう。」

結局自家撞着するからだ。つまり論理的思考という帆船が天空の星を基準にして無際限なる海を渉る運航規程に遵うのであれば、もはやこれは問いとして成立しないからだ。

だがなぜ遵わなければならないのか。そもそも運航規程は正しいのか。

だがすべての問いは論考の範疇だ。観察に拠って確かめようにも、観察したものを捉えようにも、小生らには論考しか術がない。

運航規程が規定するところに遵って、未検証のものを検証の材料・方法としては使わないとすれば、運航規程は使えない、運航規程に遵うならば、だ！ とは言え、論考でない問いはない。問いというシステムが既に論理という体系の一部なのだから

「どうしようもないね。」

問いばかりではあるまいよ。すべてが、だよ。論考は殆んど意識だ。意識は論考と深く融合して境は曖昧だ」

「なるほど。意識からは逃れようがない。小生ら」意識だからだ」

「我々には意識しかないが、意識も確かめようがない。意識の精確さは確かめられない。論考の場合と全く同じ。パターンではないが、状況は同じだ。意識を対象として確かめられないからだ」

「それもまた経験知を論考の運航規程の規定に遵って整理した結果だ。運航規程は経験知に基づいて、確認のために対象化を要求する。我々は認識するにあたってすべて対象化を要求する。対象化もせずに確認するなんて空想すらもできない」

「しかし我々は生きていられる。(少なくとも)何万年も生きて子孫へと生命を繋げている」

「二応」解っている」からな。深度も精確さも皆無だが。生存のためには不足がないようだ」

「理解しているんだよ。我らなりに」

「とにかく小生らは『理解』という現象が脳内に生じ、日々の生活に実存的な支障はなく、どうにか生きていられる」

「そうらしいね。理解とは、いったい、何か。君の言うとおり、ただ、唐突に、納得という心的な現象が起こっているだけでしかない」

「結局、すべてそういうことなんだ。自然現象みたいなものさ。理解されても検証されても意味はないんだ。いやはや、無意味ですらもない。いや、それですらも。いやいや、それですらも。」

否定の無限なる遁走曲 *fugue* だな」

「言いようがないね。こんがらがるよ。どこにもどのようにも着地ができない。着地ができないという結論にも着地できず。やりようがない」

「ふ。未遂不収さ」

「空漠な論議だ。時間のムダだよ、真々くん、何で『真実とはなんて言い始めたんだ』

「暇つぶしや」

そう言うと、天易真々あまやすはキャラバツシュ・パイプを吹かした。

## 第一章 真実の研究

普蕭は古本屋を経営している。大学時代からで、既に4年以上になる。雑居ビルの一階で、地下は地元の人しか知らないライブハウスだ。神中洲と呼ばれる小さな繁華街の一角で、最寄りJR難久なぐくさ駅。彼ら二人はこの狭くて埃と積み上げた古本ばかりの古書堂の奥で、苦いコーヒーを飲みながら稀覯本をめぐっては無駄に語らっていた。

天易真々は口髭鬚類髯を臍下丹田まで伸ばし、片眼鏡をかけて、ウィザード・ハットをかぶり、水色のサテン地で作った膝上丈の礼装用軍服(肩の房飾りや飾緒(片肩から胸中央にかけて吊るす飾り紐)のあるタイプだ)を着て、穴の開いたスキニー・ジーンズを穿き、蛇皮のロング・ブーツ(皺々にたるんで緩い靴下みたいになっている)という奇態な格好だ。

天平普蕭も彼ほどではないが、奇態な服装で、大きなカフスの附いたペイズリー柄のフロック・コートにボルドー・カラーのシルク・シャツを着て、黒いクラブットをエメラルドの附いた金具で留めている。

午後のまつたりとした時間で、深く差す陽射しは暖かいが、午後2時半にして既に黄昏の茜を孕む黄金色を呈し始めていた。

埃が燦めき、水中を舞う金箔の片のようだった。

重たいV8エンジンの音とともに同源叭羅蜜斗じやうげんぱらみつとが入って来た。貞観正國寺じやうかんしやうこくじの倅で、金髪のス파이キー・ヘア、ムスリントップとよばれるTシャツ、黒い皮革製パンツ、鉄の鎖のネックレス、安全ピンのピアスという姿。

「いよ、相変わらず湿気てるな、机上の空論者ども。実存は本質に先行するんだぜ」

「むしろそれは小生らへの反論にはならないな」

真々は無関心にそう応える。普蕭もまた、

「さつきまでの話を聞いていて、なおかつそれを理解していれば、確かにそうだな」

黒くて小さな四角いサングラスの下で貌を歪めて滑稽な表情を做りながら叭羅蜜斗は言つ、

「何だよ、そんなこと言われてもわかんないぜ。いなかったし、たぶん、いてもわからなかっただろうな」

「心配ない。小生らと何も変わらないさ。いや、『同じ』も『違う』も、とてもかくても、って感じだけだな」

真分がコーヒーを啜りながらそう応えた。

気を取り直して叭羅蜜斗が言う、

「実は変わった古文書が倉にあつてな、取り敢えず持つて来てみたんだ」

「おいおい、大丈夫かい、勝手に持つて来て。君のところは貞観年間（859-877）以来の古刹だぞ。貴重なものだつたらどうするんだ」

貞観正國寺は畝邨村にあり、眞神郡の一つだ。貞観三年（861）四月に福岡の直方<sup>のうがた</sup>に隕石が落下し、同六年（864）には霊峰富士が噴火（貞観大噴火）して民衆の心を動揺させ、これによつて蝦夷の眞神で叛逆が起るぞよと流説され始め、貞観八年（866）三月、大内裏の正庁である朝堂院の正門（応天門）が放火されて炎上し、白河殿すなわち藤原良房公が古代名家の伴氏を流刑に追い込んだ応天門の変が起こったとき、その時の勢いで、眞神の葬之家に仏教への帰依を祈為のない証として命じ、王家の分家である同源家がその仏門を宗とすることで折り合い、貞観正國寺が建立された。

「そもそも小生らに見せてどうする」

「まあ、見てみなよ」

叭羅蜜斗は不似合いな藤色の風呂敷を広げた。

「ふん」

片眼鏡を指で動かしながら真分は眺めた。普簫も反射的にルーペを取り出す。

「小さな巻物だな」

幅5cm長さ15cmの小さな黄檗色の紙片だ。

「百万塔陀羅尼に似ているね」

「しかしながらそうであれば貞観正國寺の建立より古い時代だ」

「天平宝字8年（764）か」

「そう。百万塔陀羅尼は、藤原仲麻呂の乱を平定した称徳天皇が鎮護国家を祈念し、併せて戦死した将兵らの霊を慰めるために『無垢浄光大陀羅尼経』の陀羅尼を印刷して、百万塔の小型の塔に収め、法隆寺・安寺・元興寺・興福寺・東大寺・西大寺・崇福寺・薬師寺・川原寺・四天王寺に奉納したものだが、ここは蝦夷の涯だし、完成年代も寶龜元年（770）だから、時代もまったく合わない」

「内容も『無垢浄光大陀羅尼経』の陀羅尼ではなさそうだね」

「よく見せて。ふむ。文治五年己酉八月秋分次候とある」

「秋分？」

「二十四節気によるとすれば、秋分とは概ね9月23日からの15日間だが、次候とあるから、初候・次候・末候の真ん中で、28日から2日までの5日間を示すのだろう」

「思い出した、平泉陥落だ」

「そう、奥州合戦だ」

叭羅蜜斗が皮肉な笑みを浮かべる。

「奥州征伐とも言うがな」

「で、この内容は」

普蘆がそう言いながら顔を近づけると、真分も身を乗り出し、

「待て、待て。ふうむ」

「何とある」

「これは、摩訶般若波羅蜜多心経だ。…そして」

「そして？」

「末尾に願が記してある。写経の後に願いを書くのは、よくあることだ。心経を3回写経している。そしてその最後には」

「何とある」

「**怎不是有是有請教**（なぜ非有があらず、有があるか。教えてください）」

一瞬の沈黙の後、普蘆は奇妙な表情を浮かべながら言う、

「日本にライブニッツがいたことがあったか」

「ないし、時代も違う」

「しかしこれは『なぜ非存在ではなく、存在なのか』っていう、あの有名な問いと同じじゃないか」

「そのようだな」

「書いた者は」

「**彝之又候神火斗**（いのまたさぶらうかむひと）と記名してある」

「彝之…、彝之家の人間か」

彝之家は眞神の里を古来統治し、代々眞神一族の王を世襲した家である。

「しかし何で寺なんだ」

「心経だから寺でも不思議はないだろう。仏教はそもそも大和朝廷に押し附けられたもの。我々の本来の宗旨ではない。氏神である眞神神社へ奉納するのが正当だろう」

「俺が言うのも何だが、俺んちは妥協の産物だからな」

「平泉陥落は関係あるのかな」

「頼朝が蝦夷をうろうろしていた頃だ。二十万以上の兵を率いてな」

「取り敢えず資料館で調べるか」

「べ裂に來てもらえばどうか」

彝之べ裂はやつて來た。精悍な長身で、蓬髪によれよれの袴、尖った鼻と顎、イメージ的には脱藩浪士の風情だ。

「系譜図を持つて來たぜ。もちろん汎用の印刷物だが」

「で、いるのかい」

「あゝ、平安末から鎌倉時代だ。黒龍ヶ淵の分家だ」

「彝之家の戦闘集団か」

彝之家の黒龍ヶ淵分家は近衛軍的な存在として特化した王家の血筋の者たちだ。

「では、ひとまず又候神火斗について調べよう」

「資料はあるかな。当時の官位にもよると思うが」

「王家に連なる者。記録のないはずはない」

「だが本家の倉か文書館に行くしかない。いくら王家でも、その枝葉の一人一人までも大々的に記録しているはずもない」

「文書館、校倉造りの正史倉文書院か」

「事前に連絡を入れよう」

「では骨山へ」

しかしそうはいかなかった。用意・準備があるというのだ。

「已むを得まい」

一週間後に文書院から連絡が入り、4人は再び集う。

「とても待たされたものだ」

骨山は王家の住む眞神山から2 kmほど離れたところにある。黄色いつるつるした岩山で、ほとんど植物が生えていない。王家の史文官であつた彝之隨神がこの標高百メートルほどの低い山の頂に文書院を建てさせた。2世紀頃である。

校倉に着くまでに三つの門があつた。その最下部を武門の懿家が管理している。中部を懿家の君主である平衛家が管理し、上部を古代の大貴族であつた天平家が管理する。現代の総括責任者は天平天猛斎だつた。

粗削りで不揃いな、歩幅の大きい石段を上つて懿家の石造りのアーチ門に達する。アーチの上には向かい合う2匹の獅子がいた。

「彝之べ裂だ。そして同源吠羅蜜斗、天平普藏、天易真分だ」

「どうぞお通りください」

平衛家の櫓門でも同じことが行われた。天平家の壮麗な櫓門もまた同じだつた。

大校倉は床の高さ12メートル、棟までの高さ34メートル、間口56メートル、奥行78メートルの巨大な木造

建築であつた。その隣にカイゼル髭を蓄えた巨漢の天猛翁を当主とする一族の屋敷が点在する。彼が直々に出迎えた。

「ほうぞ。こちらです」

低くて威圧感のある野太い声だ。彫り細工のある太い革のベルトで貫頭衣の胴を締めて、刃のない青銅の剣を佩いている。鞆は金属細工の細密な紋章や鏤型による浮彫で見事に飾られていた。真理を護る聖戦士というわけだ。若い衆が手すりの附いた大きな梯子を持つて来る。

厳かに開けられた扉の向こうからは木のよい香りが漂う。最上級の木材が吟味されたであろうと空想する。古代に於いては真理に対して無限に手間と費用が架けられているのだ。建物内部は3階建てで、いくつもの部屋があつた。

案内されたに部屋には数千冊の人之鑑（ひとのかがみ）があつた。

「彝之又候神火斗の記はこれです」

真分が手に取りながら片眼鏡の位置をずらす。暫時黙読していたが、

「ふむ。この辺かな」

「何て書いてあるんだ」

叭羅蜜斗が尋ねる。

「やはり頼朝の奥州征伐と関係があるようだ。文治5年7月25日、奥州藤原氏の当主であつた藤原泰衡から『源頼朝が義経を匿つたことを理由に、蝦夷地に攻め入り、平定しようと企んでいる。ついでには相共に闘うべきである』という旨の文がきたらしい」

「ふむふむ。それで」

「ところが当時、眞神族の軍の將軍であつた又候神火斗は、俘囚上頭を称する藤原氏が、泰衡の祖父基衡（奥六郡押領使、出羽押領使）の時代に奥羽俘囚であつた東魁剛佐衛門に命じて眞神を打つべく騎馬を動かした歴史を忘れていなかった。彼は要請に応じなかつた。

又同じ頃、頼朝からも文があり、藤原泰衡を討つべく協力要請があつたようだ」

「なるほど。我が民族は民族の歴史を深く知る者が多いが、これは余り知られていないのではないかな。或いは僕は無知に過ぎるだけか。さてさて、彼はどちらを選んだのか」

「国益を思えば、当然、頼朝だ。しかし又候神火斗は国益の敢えて逆へ歩を進めた」

「だがそれは火々禽（はまどり）の柵（さく）の戦い以来、朝廷に臣従する誓いを違えたことにはならないのか。それはそれで眞神の精神にそぐわない」

「又候神火斗は頼朝が皇家の討伐文（令・許可）を持たずに行動していることを見抜いたのだ」

「なるほど。しかし結局、奥州藤原氏は」

「ここに、かつて金堂を見た又候神火斗がその荘厳に感銘した記憶を録す文があり、かような美しきものを軍武から護ることが高貴な行為であると書いている。

しかし平泉は陥落してしまう。

馳せ参じていた又候神火斗の率いる眞神騎馬軍も奇襲を受けて囲まれ、囚われの身となってしまう。伝説によれば彼は生死を超える咒を唱えて大巖の狭き狭間に木柵を立てた牢から脱したと伝えられているが」

「事実かどうかは別にして、もしやそういう関係である巻物の般若波羅蜜多心経の写経が作られたのか。それで平泉陥落の時代と重なるのか」

「そのようだな、生還を感謝して写経して貞観正國寺に奉納したらしい」

「ほう。これで解決かな」

「ライブニッツ問題が解決していない」

「生死の境で究極の問いを問うたのかな。どうもしっくりこないが」

「まあ、そのときの心情は、現代の小生らの平穏日常時の心情からは推し測れないが。

機会があれば調べてみよう」

散じた。

数日して真弓が普蘆を訪ねる。

「江戸時代の文献に関連する史料があった。禅僧の无絶空がああライブニッツもどき文を見、『これ、隻手音声といふに同じうなり』と録す文があるのだ」

「ほう。興味深いが、どこが同じなのか」

「難しいね。ここからはもう、小生の勝手な妄想に過ぎないが、強いて言えば、どちらも不可能事を言っている。片手（隻手）で鳴らす拍手の音がどんな音か、という問い。なぜ非有ではなくて有があるのか、という問い。いずれも解答不可能だ。これによって推察するに、かように常軌を逸脱して、五蘊（生存）を超越する天機を獲得し、心の妙機とも言ふべき働きを呼び覚ます…そういうことかな、と」

「それで牢（骸の牢獄Ⅱ肉体・五蘊）から脱目する、っていう説話になったってわけか。…あはは、って感じだな」  
「ふ。素敵だね。言葉にするといかにも虚しい。辻褄が合っと、寧ろ、全く以ていかわしいものだ。下痢でトイレを血眼で探しているときに考えたくないようなことは大概くだらないことなのだ」

## 第二章 真実の実践

无絶空は元禄2年（1689）に眞神郡歌邨村に生まれ、竹虎寺で出家し、天明元年（1781）に鎌倉にて客死した臨済宗僧侶。